寛保特行

芭蕉翁貞享遺稿

句餞別

自在菴跋

書肆 文叢堂

句餞別目録

歌仙一巻　発句露沾公　ワキ　[illegible]翁
翁ノ附合不少他准之
十八句　半歌仙ナリ　発句濁子　脇翁ナリ
十句　表八句ウラ四句　発句松江　脇翁ナリ
十句　同前　発句峯白　脇翁ナリ
沾化僕吼雲口號一句
以上　附篇
芭蕉翁師家之系

芭蕉老人有故赴鄉國老人常謂他
鄉即吾鄉今猶莫作戲斯語　吾何不
信斯語乎因綴卑語三絶以投頭陀
其一　絮金　素堂山子
君去蕉庵莫止鄉　故人多處即成鄉
風飡露宿豈勞意　胸次素無何有鄉
其二
弱笠瘦笻寄一身　離筵回首惱吟身

河邊楊柳無由折　早動翠條迎老身

其三

陽月稱陽又小春　小春又那似陽春
舉盃皮裏陽春在　為唱陽關一曲春

奉送芭蕉翁赴于故郷

桐山正堅

東西兩地學參商　獨向北風伴雁行
汲汲浮生如一夢　皈郷來日報平康

餞別二四六八十言　歐詞不章故旁點

友松政宜稿

霜散道鼎　杖直穿影　笠曲戴晴
君徃伊州別葉　我留江府金城　冬夜長雲長幽夢破　逸興飛雪飛佳句成
歌枕尚宜聽處處寒山寺　月和脛輕得天倫娛樂情

旹貞享四丁卯歳十月廿五日

あれはかへ帰るを送りてまつ

嵐蘭

ふちかう蒙し住ん雪見を
かきしるすためる乃古風をうつく
俳諧をのぶ

送君小橋側　丁卯初冬日　仝人拜稿

分袂隔西東

動風岸上柳　散霜林下楓
遙想多病軀　長路豈無忡
飄然一囊子　句丈任天工
頽笻萬里雪　破笠孤村衆
筥根山巖巖　大井川洪洪
登嶮強莫歩　臨水亦乘驄
無事到故國　先傳平安衷
佳景幽勝地　只恐久認蹤

從今花與月　獨吟望蒼穹

餞別　遊蘭

くさまくら寝覚しのつゆかるや

伊勢路まくらぬらしあらにまかせん

同　安適

まくらへる涙をこころにかすかれよ

花を海ちへあ国よゆくらむ

離別　同

ゆくその路もすましむさしあふみ

さすらひ人へしきみれなあかり

色香や庭を花そろく梅月よるかかん

とすゐあふ人へいあかしをこそりすある

人へいふころを送るへきれ別け二ら

よあつらくすましまろしのきそはよ

かなひけるこの一つの鳥中をゐらわ

これをあつらへてかゝらをすにかゝるの

なをし

あらしのかしみち奥の院ゆふされ　素堂　山子

簡るよりら花やめへし名の果　ネト

鳴千鳥富士を見かくれ汐見坂　杉風

仙化

梅のくいよもしてふかん雨後外　小鯤

義也もるまちを鳴かん春の庵　而已

ミツまるや衛いおする波のかし　ちり

まめ月い花雨ふらん一しぐれ　荻風

永き夜を咄(ハナシ)ん雪の草枕
泥芹

初春やたてまつらん梅の花
苔翠

白や花しをるもつれなき門の雪
文菊

雑煮ゐよ膳をならべん雪の檐(よぎ)
凡泉

きつねや見えつ隠れつかくれん
水洋

雲晴んで月をおしむや花の梢
翠桃

くらひゆく何田は笠り雪の笠
みさを

春雨や師の膝枕よ梅の花れ
由之

さゝ山さくれなすびを転けれ
孤屋

十湊よ綿をひろげし雲夜かな
如泥

寐よとれ霧ふる夜かな
露荷

蒲團
干されをとりす女もあし旅の宿
卜子

旅寐して織さへくるしまれてれ
蚊足

こゝしもや大井の岸佐夜の里
沾蓬

萩の女陸奥の紙布とやせそ
もと

風乃ゆきりくしろすましれ
嵐雪

ウ

池の穢浚し姫か垣根く　角

これと入帆のこゆるや繊し　吾

世の中を書にのみする草の細　子

妹がかしらのかゝる兒やさしき　翁

ありて不縁の切のちらしに　吾

笈を占きし国の髭風　子

鳩の園のねかにいつしよかゝりて　翁

二夜よまれ泊くし　侍　吾

一巻の連衆もやしむ氏ちれ　子

苗代ゆるゝ風雨に濁りし　吾

鵙の巣のいくつか花よのれすゝそて　翁

旅笠下りかゝるまゝの夕月　子

十句　松江

おほろ月に蛤をとせ乳夜の縄

一夜別るゝよゝり一輝　翁

枯草にいたし松のまはりして　曽良

餅　二つまて喰ひしか節　白

赤飯むしけるよりの松ひろん　毎

誰かぬしまて餅すらく　石

妙庵乃楊子すきもる居士家

花僕
吼雲

跋

自在菴　祇徳　記

八雲神代よりいひく誹諧歌是ハいかなるをいふ
ふりあらんまさしき様なる人にしらをしと
も不知之而海後なれと何ともなるあり
りん後於書遣まし千載集にも入るなし
歎ありてその様知らなし　末代人非可定
といへるより今の誹諧なるの賢る輩
稀也志つるに於世よひろくもてあそふ

東ハそのころ連誹乃あそびあかく連歌の書や
かるる後宮にされそみさる誹諧舞に從(守武)ひて
第ひ(宗鑑)をとるものゝなかりしところの舞にかり
みさうかりて國ゆかるるれをかりもて
ゆく事貞徳道を遂く芭蕉句をとく
のひ千載不朽乃一宗となりて誹諧連誹の
四家とるなつくる形りされはや三傳の
名家を世井に三代宗道とそゆり

三代宗匠之系

祖
貞徳

松永氏　長頭麿　延陀丸　逍遊軒

又永種七才にして東福寺の喝食となる多能
なりし聰慧なれハ学文殊喝食となりけし

心を歌林に寄思を風騒に弄し老後自らしかと
常に本甚乃從柄をもてり
妙法院法門主より大佛の稲かく地面を給
ひして若兆溪に達く吟花廊と又回廊には
本超舟をあらはかすより又桃園柿園櫻占留
あり
　承應二年十一月十五日九十四歳而卒（一説百十七）
洛お下かり霊実寺に葬る寛保四まて九十二年に至る

季吟

北村氏 法眼 拾穂軒 再昌院法印

宝永二乙酉六月十五日卒 齢八十二 東叡山池ノ端 正慶寺ニ葬ル

近江の産にして初雅より醫術を学ひ
慮庵と云ふ 後に正章（貞室）に従ひて流れにさえ
そのうちに移りて貞徳門に入り
歌学に長し なかんつく萬葉を考へたるもの
かし 東都より移りて歿す
嫡子湖春元禄十丁丑正月十五日卒 貞徳季吟に学
同月日卒す
○西山宗因よりは貞徳を看破し
て一派を建てたる談林風なり

芭蕉

中興開祖 句作別ノ撰者

松尾氏 桃青 風羅坊 泊船堂

元禄七甲戌年十月十二日病疾を病て旅に死す
寛保四年まて五十一年になる

伊州人仕府主君而有忠勤學才秀發懐出塵志故
解紐斷髮永成隠士性好風雅師北季吟幾乎得
其一體也
もし宗因に従ひし後に看破して荘子の
本情を探りて正風の一躰を建て天下に誉て
説法中興の開祖と崇めて儒家八家の祖
師のことし 門人三千有余なり